

## メッセージアウトライン

### ローマ6：1～10「キリストとともに生きる」

[1]「それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。」

パウロは神の恵みを誤解する者の立場に立って、自らこのように質問を投げかける。罪を犯して罪が増し加われば増し加わるほど、神の恵みが満ちあふれるのならば、罪の中にとどまっていればよいではないかというのである。

[2]「絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。」

「罪に対して死んだ」とは罪とは全く無関係な者となったという意味。どうしてそのような者が、なおも罪の中に生きておられるのかとパウロは言う。罪に対して死に、神に対して生きることがクリスチャンの生き方であり、霊的本質なのである。

[3-5]「それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。…」

「バプテスマ」とは洗礼のことであり、ここではキリストと生命的、有機的に一体とされたことを言っている。イエス・キリストを自分の罪の贖い主、救い主と信じ洗礼を受けるといことは、十字架上のキリストの死と一体化されること、そしてキリストとともに葬られることを象徴的に意味する。キリスト者はイエス・キリストにあつて罪と自我とこの世に対して死んだ者であり葬られた者なのである。しかし、それがすべてではない。4節にあるように「キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするため」なのである。むなしい生き方ではなく、キリストの復活のいのちによって、充実した、新しい力ある生き方ができる。5節ではパウロは接ぎ木の例をもってそのことを教えている。

[6-7]「古い人」、「罪の奴隷」とは信仰に入る前の罪に支配され、生まれながらの肉体的な性質に従って生きていた状態の人のこと。しかし、信仰に入った時に、この古い人、罪の奴隷たる人はキリストとともに十字架につけられて死んだ。それは罪のからだが減びて、もはや罪に仕えず、罪を主人とせず、それから解放されて新しく生まれた者となるためであった。「死んでしまった者は、罪から解放されている」のである。

[8-10]8節は5節で言っていることと同じ内容。パウロはこれを信仰の確信として「信じます」と告白する。「キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。」(9) 神なるお方が死に支配されることなどありえず、このお方が死なれたのは、ただ一度私たちの罪のために死なれただけであり、今は父なる神とともに永遠に生きておられる。(10) そして、イエス・キリストを信じる者は、罪から解放され、自由にされ、新しくされた者として、このお方とともに喜びをもって生きることができるのである。